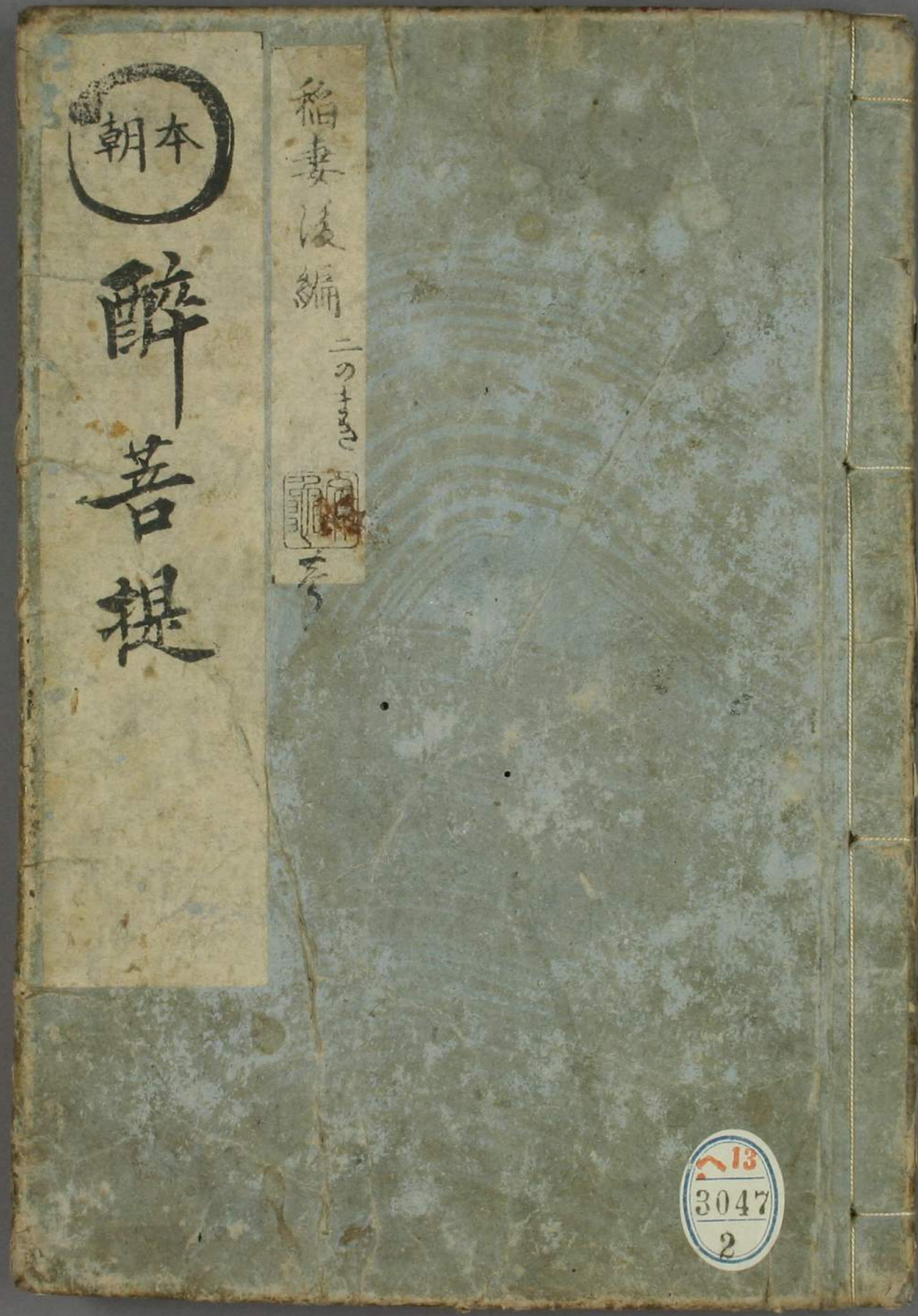




朝本

醉菩提

稲妻後編

二の巻



子



稻妻表紙後編本朝醉菩提卷之一

東武 山東京傳譯

跋
羅
馬
字
號



善惡因果序品第一

醉月堂

如是我聞佛門廣大也其一端を見て得たりとて妄想をばうとて若
如來常在して滅し玉いざりて見ば便悟證を起して厭怠を懷ふ
難遭の想恭敬の心と生ずる能はざるん歟故に雙林の下ふして假
常住不滅の月の光を以て隱しめ又慣食の衆生の面前に奇妙と見ら
わづるべ道は赴く心と起さざるがゆゑ小佛菩薩時々娑婆世界に
垂跡して種々法を説或神通を闡明して濁世の愚庸を點醒したる人
是亦所謂遊戲三昧多と云一休禪師の遊戲のごとくは乃衆生消度の
方便と云ふとて爰に八皇百三代後花園院の御宇寛正のころ日本

國中の霊境は。六十六部の妙典なりとむ。有髪の修行者。節磨の
曾根松とて者なり。曾剣難の相あるに。其難をまねるも。ついで
若年あれども。佛道はこそざり。一所不住は諸國とめ。山城國愛宕
郡六道といふ所なり。日暮登遠うして。留る病あり。火は
野宿せむと。木蔭よりてや。ひね。柳。六道といふ。鳥部野の无
常所より。諸の亡者の為。開くと。六道といふ。桓武天皇平安
城を開き。人跡あれば。死送地なくん。わづらうと。火野と
諸人の葬所と。む。遷都記は。其地。火野と。引導
諷経して。鳥部登と。送る。小野篁地獄と。往来せし。火
所と。人。火。石のま。立。びて。苔。新
の。无常遷流して。送る。日。末の露。の。平。おれ

煙常は絶るこ。名。留。无。見。松。丘。下。骨。化。為。灰。草。澤。中。と。は。一。絲
も。の。所。や。ひ。け。の。の。曝。骨。草。深。して。露。流。
と。て。や。せ。た。荒。野。ふ。て。と。凌。競。所。多。り。送。り。て。入。も。ひ。に。死。出。の
山路の支なり。悲し。煙を。月影を。鷲の高根の末。と
う。ひ。も。都。て。是。火。野。の。哀。と。ひ。る。去。程。は。修。行。者。曾。根。松。の。古。と
松の下。苔の露。と。ひ。て。炭。と。お。り。お。り。も。孟。蘭。盆。の。た。た。ひ。る。れ。ば。
心。を。の。の。霊。迎。ひ。冥。途。を。と。と。迎。火。と。木。の。葉。と。集。め。た。火。と。
草。葉。の。露。と。の。手。向。の。水。と。お。り。ひ。て。炭。は。ひ。ひ。て。鉦。打。
あ。し。有。縁。无。縁。の。諸。精。灵。成。等。正。覺。傾。證。菩。提。南。无。阿。弥。陀。仏。
わ。と。仏。と。權。且。念。佛。して。居。る。月。の。影。玲。瓏。と。して。い。て。限。
も。か。く。萩。桔。梗。列。萱。女。郎。花。尾。花。葛。花。の。た。た。ひ。の。草。も。今。と。さ。り。な

咲乱さきらんきて露つゆおもひあり風情ふうぜいあり。うつくしに鳴なきつと虫むしの音ねのちや
 あり。念佛ねがひの色いろ鉦かねの音ねよひびくわひて。いつの淋さびしくもろふ良よを
 催もよほしぬ風ふうよつきてすゆる塾しゆく寺でらの鐘かねとびくりに夜よも己おのれは更ふけ焼やき火ひも消きえ
 えてぬれぬ。うづ一ひと睡ねせむやと油紙帳あぶらふちやうとふれて夜露よるとあのみぎ雨衣あめぎぬとあそ
 めりぬ。木の根ねと枕まくらと。身みとこころて睡ねよつと。前後ぜんごもあかえんど
 熟睡じやくすいしるる。や時移ときうつりて睡ねを醒さめし。耳みみとどぶづと。宵よひの虫むしの音ねを
 うごめく。いとむとに管絃くわんげんのあぶとあえらる。修行者しゆぎやうこれとと
 あか怪あかしかかむ荒塾わられとひい夜よふたふ。妙たうあるあへべのさことゆるそ
 めとや。狐狸野猫こりやねこの戯あそむにうとあひて。顔やがて紙帳あかしやうとびげ頭うづちとじびて
 四辺しへんとるるに。宵よのかぶらうて夜霧よぎり深く立たち籠かご月つきもろくくわうとて
 面前まへさへ見えけり。かや管絃くわんげんの音ね霧きりの裏うらあをて今いまは近ちかくくとあえられぬ。

益怪耳をうへけて居る。誠是極樂國の微妙音をいごとりと疑はば。曼陀羅華も雨来べくあつれ
吹くごとく。此微妙音をいごとりと疑はば。曼陀羅華も雨来べくあつれ
る。時は一陳の疾風颯と落し来て霧を吹拂ひるに。月も再びやさ
結構美麗を盡したる館造忽然とあらぬ。其様はなれば。翠簾を
たはたはと動かす。欄干階級杉戸折戸。櫛形の穴書院のまに。總て庸常
あつた。彩色の繪障子金地の屏風月の光は。照りあひて耀り。地より一時は
涌出るとあやまると。正面の上座は朽木形の几帳をさて。唐錦の裯を
まうけて。どこのころのひ五十むろとおかしく。執念あうげなる面ざりの上臈
さけ。黒髪を乱し。髪紐をむとび。白綾の小袖は。厄子の濃き腰巻
あう。脇息と傍におき。琵琶と鼓居り。左りの方。総髪頭の頭は。素
雪をついて。額に老の浪と。え面野狐のごとく。眼皂雕に似る。

地獄におちて无量無限の苦を承け。片時も身と安んじることあり。此の
ことも苦患とまぬ。時のあづかりもかり。娑婆に残るのことも。
災をうけて冥途よりあひ共呵責を受めて宿恨をもちてまた人
あれば存する所ある者いふやうにせしむ。修験者といふも小人
つゝおらん。ういゝ管領濱名入道由理之太夫勝基と。あひての鉾楯
よりて遠くぞ合戦おこる。又勝基の天寿已つて病を生じて身ま
うぶきささうあり。小人其虚をうけて梅津嘉門景春が一命を奪ひ。
蟹藏三平泥助雁八寺四人の輩。小人よりて共災をうけし。小人
娑婆にあり。時妖鬼の術を行ひ。或妖鬼に化して名古屋山三郎
も災をうけ。鼻とあはれし。伴左衛門これと。いふもやこれ
なり。小人の身伴作が胸間を分入て山三郎が妻八重垣とし。或

性生
要集

小蛇と。うて彼が子小山三は災をうけし。道犬くもづき。うさぬ其子
段より。小人の嘉門は深き恨あれば。彼が妻子どもと尽く亡る。蛇手
のむ方より。うさぬとやうな。蛇手の方笑つて。息を
あけ。うていひる。我のあひて悪しと。継子桂之助。銀杏前月若寺
は着て恨をむけ。いづいづの館と。想をもち。やと。うさ
いふ。いづれも口と寺して。それある。いづれと。已に評議一決。蛇手
の方再。いふやう。我娑婆にあり。時。汝寺が面と見。日もある。い
今地獄中より。いづいづの在所を異し。主従の縁。尽て相見。又。い
あひて。あひて。あひて。時々所を更て呵責せられ。修羅道より。て。夜
三度。三度の修羅の戦。斬つて。身をと。骨を碎き。あひて。血
られ。あひの波。あひて。盾を。あひて。女。あひて。戦。あひて。兵具。あひて。



不登西吉提卷之一

五

来りて其身と責害とを畜生道よりわけて頭へ人よりありあり。身の
牛馬とあり。磐石とあり。火途劍山とあり。餘鬼道よりあり。飢
渴とあり。其身瘦れて哀れ。後登じて長閑
の春の風も例とつづ。たゞ清き流と臨みて走りひひ。手はびて吞
とされ。たちまち火焰とありて身と集と。つづの苦む。汝らも
さこそわづら。だぬ。閻魔王よりぬりて此所は會する。かま
せめて汝等ともぬりて酒吞。片時の飢渴とたそくべ。其用意
ごとくせよ。おめされ。蟹藏三平うけり。いとい。次の間。一人は長柄の
鉋子土器とたづ。一人は脚打の廣折敷蓮の強飯とつづ。盛て
さげ。蜘蛛手方の目通りとある。蟹藏酌より。蜘蛛手方土器取上て
うづ。たまへ。膝行よりたづ。とつづ。飢渴より。蜘蛛手方。とく

のまゝと土器を口のわづらよりするとい。酒青き色の炎とあり。火
閃と燃上り。面と集より。おめ。土器を破とあげ。とく
悶絶。のけさぬ。倒とあり。蟹藏が持つ長柄の酒も。一時は炎とあり。
ろろ。たぐみ。琵琶の上と取り。炎轉手。撥面と然つて。半月の月
の光も。三惡道の煙の裏とあり。大鼓の火焰も。目前は焦炎地獄をみる。とく。
笙の簧も。抜散て。抜舌地獄とあり。道大伴左衛門寺かどろき。蜘蛛
方と杖起。と立ち。蓮の飯も。烈火とあり。猛火とあり。燃上り。
西人の身と焦。とあり。仰反て。とあり。虚空は雷の如き音轟々
とあり。とあり。衆皆これと等。面色青ざ。とあり。修羅の鼓のひびくあり。
閻王のひび来る。又呵責。とあり。苦む。とあり。周章。とあり。立。とあり。
忽ち。黒雲。とあり。地獄変相の旨と見え。奪魂鬼。棄精鬼。縛魄

鬼と三の鬼戟を把。劔を持。黒繩をたぐり。牛頭馬頭の阿防羅刹は火の
 車とおさせて虚空より馳下り。毒蛇惡猫。无常鳥。拔目鳥と放かれ。鬼皆
 逃去んとする。獄卒等鉄の杵をわけて打倒を毒蛇の頭をぐりまといひ
 つきて咽とあり。惡猫の腹をぐりまといひて臟腑をぐり。无常鳥は血を吐。火焰
 とかいて身と焦し。拔目鳥は睛をぬいて眼を啄む。これによりて蜘蛛手方
 と始りて。道犬伴左衛門其餘の者皆。総て。わが苦やなぐやと一同よ
 嘔嘔拳とふり足とぐりてり。苦い。火は入夏の虫のごとく。よ
 る目もあてられど。管絃の妙ある。調より。罵詈訛泣の色の。おどろ
 聞は身の毛もいよたね。或は鮮血は流りて。れあぬ。変じ。或は焼爛て黒
 じ。変じ。筭木とせざる。倒して皆死入ぬ。ぐて。いふ。どと。いふ。よ
 獄卒とも立寄。活々と唱て。醒。やがて。換息て。舊の形もあり。と。

情氣も。襟首つりて。残り。火の車に乗せ。虚空をさして。馳駈る。
 猫蛇のたぐひも。共。ゆくと見え。再又一陳の疾風颯と。あり。来て。館造
 と吹散。い。け。様。失て。忽舊の野原とあり。高灯籠の火。さ。えて。
 凄涼寂寞。こ。唯虫の音の。残り。修行者。曾根松。あり。の
 者あり。魂も。浮。骨髄も。碎ぬ。心地も。さ。元来。あり。あり
 者あり。此始終を。残り。見果。あり。の怪。これ。是皆夢中。妄想。
 幻の間の怪異あり。其境。だ。い。さ。い。が。彼人。の叫。い。せ。
 姓名を。い。お。い。う。伴左衛門。といひ。不破。伴左衛門。あり。
 名古屋山三郎。といひ。る。も。ま。つ。る。名。あり。と思ひ。て。四辺。を見。千草
 のうち。と。ろ。ろ。炎。焦。と。ろ。ろ。あり。さて。現前。は。者。の會。を。見。
 呵責の。あり。と。見。あり。此所。を。六道。といひ。婆娑。と。冥途。の境。めて

亡者の往來をゆゑといひつゝもその言はわづと。獨言ひて現化不思議を恐歎し。夜已に明れば紙帳雨衣ととりあさる。笈をせむ錫杖とつと。鉦うちあじつて立去んにあつる。草深を裏より野卧の七食二人あつたれ。去さるゝ立ふさかりて。物ありけるお修行者。盆の功徳は施しめせとよぐつぬ。曾根松のこれと耳かおまされど。道を以て彼方より。爰にも又七食二人ありれて。おみどとこひひてさへつゝ。曾根松の左右の道をふさされて。せんまゝく立をまう。朝の雲々の霧一所不任の身の上なれば。施さるゝ物の貯まり。どく道とひうさて通せといふ。七食寺つぐ。我輩がえんが其懷豈手をむくくをめんや。汝手ばうう施さるゝ手むとにぞと叫りて。四人ひとく身はおあひする薦と手むや。摘捨て右左に立ちあふ。曾根松の更とせど。わくそ笑しと

居りりるが。身のかさぬ七食も。懷目かけてさしり。腕首とくへと捻久し。弓手ふりて足下に踏て。振然と打笑。我叔門は志と運び。慈悲善根と昔とそれども。盗人はあつる。錢財を持ど。蔣草席の新経帷子に身につけぬ。餘鬼道の衆生等。此の名はあふ鳥部山左むり手の裏望あり。握拳の六道銭。一打が南无地藏地獄の引導授てやうんとやうて。襟上つんで地は投げ。早旦と飛して踏倒し。あつとせむを取つと。弱腰とてひるが。續てやると錫杖ふて向脛あはて打倒し。朝露りら。諸草の花と微塵は踏散して。あむのあひと挑し。あひうけざるえたきよ。くわのいどと七食も。鷹は追を鷄の如業間。高遠して何方ともあつ逃失り。偕修行者の後もんと。あづふ鉦をあつと。ねがうとどる旅鳥。東とさへて歩行ぬ

○修行者霧の裏は妙音と聞て極樂國に到るると疑ふ疾風霧と
拂ひて忽地獄の变相と見妙音は乃罵詈訛泣の色と変じ地獄
天堂は乃霧一重と云ふもの。修行者の一切衆生疾風は本来空
霧は迷悟の堺たる。此段は佛鬼一如の理より云ひてはる。
夫の諸君は又信濃國の全護職は望月左衛門頭廉と云ふ人。
管領由利太夫勝基の心はかゝる人。室町所乃沓氣色も
人ふをばれてはる。其家士は訖麻彦太夫といふ。小祿をある人の
あれども。曾茶道をたし。其業は達し。頭廉の茶の湯の相手と
ありて側近く仕へり。其子小彦惣といふ者あり。了角の比より召されて
小扨従をつとめり。十七の年父彦太夫病よりて身まゐる。母も
續きて亡人の数より愁傷深り。其後元服し家祿をまたまり

近仕の者にえられて仕へ。此年曰は二十一歳ふと到り。此彦惣元来
才あり。よろづの書より人もの。弓箭の藝は携り。茶道と學て
其道とき。詩歌書画の業も心をもて。多てあつて。優は情深。
ことごとく類多に養男にてあり。娘持する者。被さるに婚とてことと
る人者。又頭廉の夫人は仕侍女。香晒といふ少女あり。此年
十九歳に到り。姿最うつくしく。翠の山は月のやう。離れ肉は
梅の綻とるに似て。心の色もあか深る。心を通はせざる。然し
香晒いつのやど。彦惣とあひあそ。寄は艶書とあひ。より志と告て
さめぐ。よふに。彦惣は家の徒と願てうけひ。文は手は
さうさう。香晒は。戀と。知俱麻の河泊の細石。千は
碎る。あひ寢の。寢醒の床のう。其百影のさ。伏屋はあ

とて。ありと入れば逢ふ。相初川の名のりて。宿世結ぶの神も
浦見の山のうへに佇て。袖の涙の園原や。木薜ふみぐ白露の。玉

信濃国望月
家士



詫麻
彦惣

麻衣あさぎの。漆てやむとさうと。心やいでて。水うらじとをちう
ける。かくて香晒懐胎の身とありる。二人ともに夏の頭止んを恐る。
つふとふと心を痛めける。悪事千里とて。理かて。一人知二人知て

一家中の噂とあり。日來彦惣を嫉者おわたりければ。かげ言小いける。我
輩が身のうへ。若彦惣が如きわし。うまひわらふ。忽罪せらる。彼へ
相公の心よりあひ。小禄うとわけて。召仕あふ。愛臣なれば。うらみの言と

臨古山太郎兵衛師重圖



望月
侍女
香晒

とて。大は怒たまひ。夫人は告て香晒を夏と糾。二人とも罪をくちられ
ける。夫人これとて。彼等と深く憐れあひ。折々祖父の年忌小当りるを

くらぐ香晒くさじひかうの。毒どくが實みの親大和國おほやまとのくにはわれ。權けん且かつ彼國かのくには往ゆひて。
 身のとさまりと計はかりたまふとひめぞ。さあづべとて途中とちうにて行装ぎやうさうとさふ。
 大和やまととらろざして。もみけき旅路たびぢは赴おもむぬ香晒くさじと大和やまとの山家やまがひて生う。
 られども。幼時とよなきとき都人の養女ようぢうとありて。望月もちづけの館やうももやげ久ひさられ。和歌わかしの
 道糸竹みちいとの業わざおと。もびづることよのこやづひて。襲衣おそひのおもささる。
 身上みみづしたる手弱女てじやくめあるは。懐胎くわいたいの身みよ。あさ。殊更進退自由ことごとくせんたいじゆう
 あさ。穿うもあささる草鞋わづづを踏ふて。名なもあへる妓蘇きその險路けんちをたさる。
 あさ。脚破あしやぶも血淋ちみりて。道辺みちのへの草くさと紅べには染そめ。彼所かのところは跌つゑ此所このところは倒たふれて。
 風かぜは穀こ初花はつはなはひとく。嵐あらしはむむ女郎花じやうらうがは異ことあり。彦惣ひこそう此体このていと
 見て。かくていつづきの日ひくらろざと所ところはいつづき。自氣みづからと励むげせ。あといひ
 手てを携たづさへて扶行ふかう。山駕籠やまがらこやといひて乗のおとささる。かく道みちをささる。

わきのこの日敷を経て。辛うてやうく大和国にゆけつたぬ。香晒が実の
 親ハ山蛭の洞九郎といひて。大和国葛下郡二上嶽の麓の荒屋にとそ
 年六十はあまれども。搦戸の業として。どがた煙をたてたるが。生得貪
 欲ふに者にて。利の為に恩愛もあらず。情気もあらず。唯人よつて
 災をまゐりて。里人悪みて。山蛭といふ譚名ををいせり。
 けふや世の中はあつた人と住家といふ。委又浮ぶ海漚の且消且結て久しく
 なるまゝ。まゐりて。とるぞ宜なり。香晒は十歳の時古郷ををりて
 けふ九年と過ぬまゝ。今爰は来て見れば。人も住家も変わるが
 多く。常は遊処とせし。山守の家もあつて。叢とあり。麻畠もあつて。あり
 処へつて。人の家居とある。若菜摘む野もあらう。とて。沼とあり。
 螢追たる沢も水あせて。岡とあり。唯昔より。ぬい。辻堂の石地藏

谷川の水音のあり。折しも夕日かゝりて。彩色雲の旅衣水よりつて
 映け。笠のうでく樹の陰も。没中。秋の蟬も。宿も。迷入。群雀も。我
 身のうへとあつて。つねに。雉も。戀も。身も。と。衰へ。香晒は
 おのが生きて。家のあつて。流石。忘る。此野のを。名の一。家。以て。け
 と。彦惣と。手と。ひた。合。て。案内。野。の。風。は。怪。も。あ。つ。て。は。て。路。芝。の
 露。と。踏。分。つ。行。は。雷。又。裂。け。松。の。目。ぼ。れ。ど。と。近。づ。き。て。は。家。へ。軒。端
 かゝり。て。朽。葉。つ。り。壁。の。骨。あ。つ。て。打。ち。ら。が。ひ。葛。葛。の。ひ。ま。の。ひ
 薄。い。あ。け。り。荒。れ。た。も。は。荒。て。昔。に。か。ら。い。な。れ。と。鹿。の。皮。猪。の。皮。か。い
 の。あ。ま。く。し。と。肉。の。わ。さ。り。は。掛。渡。し。て。日。は。晒。し。狐。犬。と。つ。か。ね。お。つ。れ。今。は
 狩。と。あ。つ。た。も。と。と。い。ひ。て。下。葉。色。づ。萩。垣。の。ひ。ま。より。見。え。と。い。ふ。
 洞九郎。頭。は。霜。を。い。て。額。は。波。を。た。へ。檻。褸。を。身。は。ま。と。い。蒲

壁手とつけ。品管乃脛巾とゆひ。節巻の弓猿の皮の鞆は鹿矢のまじり。指
 たると傍におき。柴折るゝ。火のりよ。畔跨で。陶酒飲てど居る。居る。
 借もづうのやど。年々も。一夏よ。と。と。ろふ。悲し心も。あつて。人目
 まれある山里の。根無よ。と。と。わね。蚊の。女の。層の。めづり。げ。は。裕越
 こつ。つ。ふ。長。袂。打。拂。ひ。て。あ。そ。う。な。ど。と。居。り。し。か。且。彦。惣。と
 折戸の口よ。ま。せ。あ。さ。て。我。ら。裏。より。父。上。あ。ら。じ。や。と。人。洞。九。郎
 老眼と。擦。磨。て。打。ま。り。り。ひ。づ。う。ひ。さ。な。ふ。て。の。の。そ。ざ。れ。ば。妾。へ。香。晒
 ふ。て。い。と。ふ。に。洞。九。郎。打。驚。何。娘。ど。り。と。い。ひ。け。う。ち。む。い。ふ。さ。て。も
 美。麗。お。ひ。立。る。か。あ。ま。り。は。姿。の。変。な。れ。ば。我。子。あ。ら。も。見。忘。れ。し。ど。
 い。ど。く。と。い。ひ。て。簾。を。り。て。塵。打。拂。ひ。佳。文。席。打。ひ。ら。け。て。此。へ。と。い。ひ。て
 と。名。お。き。あ。か。つ。つ。と。打。ま。り。り。と。あ。う。い。幼。と。い。う。清。ら。ゆ。て。鳩。か。雁。鳥

う。と。里。人。は。も。い。な。れ。つ。る。か。を。う。う。う。う。う。生。と。う。べ。と。あ。ひ。う。と。ど。
 女。の。氏。あ。う。て。も。玉。の。興。は。糸。と。り。い。と。を。あ。た。の。り。に。娘。ど。と。い。ひ。て。あ。う。あ。も
 せ。を。見。居。り。り。り。香。晒。へ。四。辺。を。ど。り。え。て。母。さ。ぬ。の。づ。く。と。ど。恙。な。い。い
 つ。う。と。う。づ。ぬ。も。い。母。さ。ぬ。の。三。年。前。身。ま。う。ぬ。と。い。ふ。と。ま。て。打。驚。日。来
 病。が。ち。ふ。て。お。い。い。つ。れ。い。ふ。か。い。を。か。う。ん。と。い。ひ。一。事。い。い。び。く。あ。れ。ど。
 と。や。づ。う。の。身。と。い。ひ。遠。路。と。い。ひ。音。信。も。せ。ざ。う。い。と。や。あ。う。ぬ。こ。と。と。て
 産。の。恩。海。山。う。け。一。母。さ。ぬ。の。精。進。ぶ。と。せ。ぬ。不。孝。さ。よ。と。い。ひ。て。あ。れ
 と。あ。れ。ぬ。時。は。洞。九。郎。一。生。不。通。よ。し。て。養。女。よ。つ。つ。い。い。と。う。と。あ。う。
 望。月。の。館。は。仕。へ。て。居。と。い。風。の。便。は。あ。つ。つ。が。あ。ひ。う。け。ど。古。郷。へ。来。い。の
 何。や。あ。ぞ。と。い。ひ。る。と。香。晒。い。お。り。て。お。せ。ふ。て。あ。う。う。さ。ぬ。あ。も。い。ひ。う。
 襟。は。顔。さ。い。い。れ。て。あ。を。い。い。う。へ。も。せ。ざ。う。い。と。と。て。も。一。度。い。い。つ。秘。あ。う。ぬ

竟と云ひ我誤のわらまゝと語り。身のおと所あるやん怒りも顔ど。
彦惣と云ひと伴ひてまづりしと。のづ詞も梶紅葉。顔よりしとて
しひられ。洞九郎打笑。若人より多に倒しもあるぞ。彦惣と云ひと
さうくさへ呼入るとある。香晒立出て彦惣と伴ひ。父は引合をれば。
彦惣と云ひと一回の挨拶終り。さうく身のとらふたふと
いとく。洞九郎打うかづき。氣づくふもある。かゝる人へ婿男の
間あれ。りりり鹿畧とある。えらで通りの貧乏くじ。壁の崩を
繕いぬ。月を灯火にかゆ。為唯沢山あり。寛の水と借錢の。とと
いふ心あり。りりりまきもつ。まひりさん。やう年へ團とれ。身へい
衰へ。春夏の柳の射。秋冬の笛待落。くく。押上り。犬山かど。て
昼夜の山縁。鹿落。熊押かど。悪所とれた。と。險阻乃

石群をかけり。りりり。手足が丈夫あれ。若者等と劣る。吉。虎熊の
一番鎗。手負猪の向射。んと。我真似。る者一郷。ある。み。こと
見たまんと。偏祖。も。肉合。おちぬ。と。いひ。黒と腕と。か
拭て。見せ。畢竟我酒。錢を失へ。こと貪。れた。目も。る。此弓箭
さへわれ。か。二人見。養。て。見せ。さんと。やう。う。いひ。る。と。
彦惣と云ひ。香晒。いと。た。り。く。あ。て。權。且。此。又。身。と。托。ぬ。洞九郎の
日来。香晒。を。一生。不。通。と。な。れた。る。更。と。悔。居。る。と。あ。ひ。け。古。郷。と
ぬ。り。姿。の。美。麗。と。生。立。と。と。て。心。中。密。と。喜。び。且。二。人。と。も。と。あ。わ。た。
彦惣と云ひ。追。ひ。と。た。婚。と。る。と。さ。も。あ。く。富。家。の。妾。阿。曾。比。か。ど。あ。い。て。
ある。この。金。と。せ。と。や。と。あ。ひ。る。が。彦惣と云ひ。携。り。旗。荷。物。か。も。け。と。え。て。
貯。の。金。の。様。子。あ。れ。ば。且。彼。金。の。あ。る。う。ち。に。此。と。あ。さ。用。尽。と。せ。て。の。ち

追出せともおそろしく。娘も懐胎の様子あれば。其内は身うつらな
うぐーとあひて。係は片家の蛛網と拂ひ簀子と繕ひかどーと
二人ともあせ。うづのころたのりげなりてかーらふぞ二人の
者いさる悪意ありと夢なごもあうぞ心ゆしてとまらぬ。彦惣を
つと貯の金わらぬて。日づの費はええれども。坐して食へば山を
崩。居あぐ飲べ海も乾の理あれば。貯へ冬あつとを。何れも
あまを管をせむとあくと山里の住居あれば。日来学び得るうち上り
うる藝どもい。つとも用はたて。さう当りてとまらぬ業もあられ。若乃
とさみは奈良團扇の繪をかき。人づてはりてけり。あつとを。
香晒の色ある衣も所ぐ人目立といひて。布の衣は着更面を照は
塵むい盆を鏡と。髪さうわがら。谷井の水を油と。いさうも粧を

施さるども。生得たる風流の容い。うづり紅粉を調美はあつとを。
姿乃色香は失せせ。人の眼を奪ひ。野を一つ。あつと。住賤女は
岩芝といふ者あり。年の四十歳をうづりて。遠く盛とさぬれども。素の
姿いさうく。山家の生立といえ。言語立ふまの都人の
果といへ。昔のうづり。夫われども。旅商人して。はまは
ありさ。家は居る。夏はまれ。唯此女のと。独住のやう。居るが。
折く洞九郎が家。住来て。彦惣香晒寺ともあつと。のひらと
さう。あつと。ねれ。香晒。此女は賤の手業。あつと。琴調。手は機織。は
梭とあつと。同も安う。つと。月日と文車の。綱もあつと。糸車。近き
山はのりて。つと。木は草の花結。遠き海は通ひて。磯辺。はひら
貝合せ。薰簾は似る。竹簾も。其列の。さう。風もあつと。針目衣

姿もつぎもあつて唯人の人として樂しむて日を運びぬ。
 洞九郎へり結て心はたかくもれ粟の代塩の代此費彼費あどさるぐの
 夏又託し。そくくの偽をぬへて野の金を貪るも今い終なるを
 此をぬいふてををさるぐさるぐとる。あつたの苦勞のつりりるや。
 彦惣やまひの床まつき。つやくのめもさるぐさるぐとる。身上瘦おとる日
 異あかりそつおさるぐさるぐとる。さるぐさるぐとる。香晒の大は愁ひ終日
 終夜枕上まつきそいて看病し。良藥をりぬ神佛を祈り。さるぐさ
 心をけくしぬさるぐも其のいもさるぐさるぐとる。嘆き悲しぬことさ
 藥の價加持祈禱の布施物彼此と目くの費あかりる。野の金も
 残りあかりるさるぐさるぐとる。さるぐさるぐとる。着かえり
 小袖も賣代あり。れゆ秋の肌寒は鳴弱なる竈馬の竈に近死

哀さめ我身のうと香晒のさるぐとる。妾懷胎の身ふて。さるぐ
 八月より。臨月も程りたる。夫の病若本復るべ。我身むりう孩
 児も。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。
 こそとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。
 と。掻立やうさるぐとる。油さるぐとる。肉合の影さるぐとる。細さるぐとる。灯心さるぐとる。風さるぐとる。
 と立まへさ。破は屏風の骨組も。弱気はさるぐとる。紙衣。裾はさるぐとる。初霜の
 壁山の錦ひたりえて。襪襪さるぐとる。蟋蟀。瘦る。骸をさるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。
 の埋火は。あさるぐとる。兼し。草褥。貧と病の八重葎。あさるぐとる。病はさるぐとる。
 さるぐとる。傍でさるぐとる。目病さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。
 さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。さるぐとる。
 心気つれ。我よりさるぐとる。瘦さるぐとる。さるぐとる。体とさるぐとる。胸ふさるぐとる。ぬれ。

おりた頭をのげ。昔氣は息つきてひるる。我く夫婦の難義の
 こころ。皆是主君のめん目をかき。親の家名を絶したる。不忠不孝
 の報はて。天罰のあらむ所と云ふ。先非を悔る。うむる。
 我病かく日く。はかり。快気の程もわづな。その胎内
 左り。孕と。必ず。男。子。あり。さ。り。親の血筋外は。せめて其
 子と。安産。し。う。ふ。も。て。養育。し。た。久。武。士。い。あ。る。と。も。あ。う。と。こ
 者。さ。か。し。先祖の年忌親の命日。来亡跡も。い。せ。て。れ。よ。他人の千僧
 供養。より。血筋の者の手。向。へ。一。遍。の。念。佛。心。を。り。の。香。花。も。違。は
 ま。う。て。孝。養。は。あ。る。と。い。ふ。懐胎の身。を。り。て。昼。夜。の。看。病。は
 心。氣。と。損。ひ。若。胎。内。の。子。と。あ。や。ま。ら。親。乃。血。筋。を。絶。あ。ら。ば。不。孝。乃
 う。の。不。孝。あり。其。腹。の。子。出。生。し。成。長。の。後。は。不。義。し。て。ま。う。い。

子と。あ。う。ば。さ。ぞ。か。其。身。の。恥。あら。ん。不。忠。不。孝。の。者。の。子。と。か。あ。う。と。く
 ち。せ。な。よ。親の血脈と。あ。う。う。只。大。切。か。其。子。あり。と。て。も。本。復。あ
 ぐ。た。我。と。い。ひ。て。身。と。破。る。な。と。も。は。全。を。り。と。れ。ば。二。つ。あ。う。失。ふ。と
 い。ふ。の。あ。る。ぞ。う。看。病。も。よ。程。よ。夜。も。睡。て。身。を。大。事。な。う。け。ふ。
 若。此。言。を。と。む。く。あ。ら。ば。草。葉。の。陰。よ。て。恨。む。べ。し。長。く。病。苦。と。せん。う。ん。
 と。く。冥。途。よ。赴。て。亡。父。母。よ。め。り。あ。ひ。身。の。誤。を。詫。り。ん。生。者。必。滅
 の。を。あ。ら。ひ。死。ぬ。と。い。ふ。悲。し。と。あ。れ。ば。生。々。と。い。ふ。喜。び。も。あ。る。と。い。ふ。さ。う。あ。ら。う。
 過去の修因。今。生。の。現。果。拙。あ。り。る。我。哉。と。い。ふ。う。ち。ふ。胸。の。苦
 痛。の。甚。し。く。熱。氣。の。往。来。あ。げ。く。て。せ。た。る。涙。潜。然。と。枕。の。う。へ。

あひそめーが惡縁と。今更悔むひあふれば。天の祟のあらあふ。妾を
罰して夫の病を本復させてあられと心のうち念どつ。病の氣う起ると
心弱くあつたまの味あつたやもつとあてきうりりひひさあつを
おのづから藥の驗もいふえとらん。自力をつけあひて。快氣あ
やうふしてたふふ。恙あく安産をあらうとも。女の身一つて。つて養育
あらふさぞや。たふ手と手を取合て。食食非人あるをとも。夫婦一所を
経あひ。いそ心いふたにぞり。何樂しと。我をう。右はあぐくあり
べさどといひて。夫の膝は顔伏て。こがを候へ。霰ある。雲の通路うせ
さえて。乙女のかさ。玉の緒乃。されて乱るごころあり。已は二更時。時過
嵐はゆぐ荒屋も。骨は丈夫か。洞九郎。夜山まきめて。うらうら。
獺犬を栓よつる。弓箭投り。怪巾草鞋を。とたてて。苔井乃

水は足そだ。だもたる色して娘く。とふかれば。香晒の片家より。灯火を
走り。方灯より。今宵の常より。突里の。やういひ。とく。今夜の
山風さ。い。鹿も猪も。驚走り。得物あり。手とむか。ちて。飯
婚の。気分。い。食物。急を。看病て。あんぜ。たの
う。げ。心。裏。彦惣め。死ね。小栗の。鯨鬼。病。こ
病つ。これ。よ。生。死。捕。費。あ。薦。包。埋。
よ。娘。子。産。子。捨。彼。欺。
妾。あ。つ。遊。女。あ。賣。何。あ。金。あ。遠。
欲。眼。竹。簀。子。上。寝。娘。尻。目。足。胸。
ぐ。居。香。晒。惡。意。露。草。臥。玉。ひ。
酒。あ。め。ま。腰。さ。る。ん。ど。り。心。深。く。眞。

詞やさしうめてゐるが。洞九郎へ氣へ強ゐると年がけつれや。
 臂枕鼻とひく高軒伏猪の床は異あど。かる折し表のうこよ。
 人色足音さへがく。紫の折戸を踏崩し。明松と打りて。四五人一度は
 押入ぬだへふらふ吠める。香晒へ仰天し。やう貧家は盗人乃。ゆるぎ
 いまれへる。何者ぞと物陰う。おそく見せられ。破さる袈裟と頭を
 つも。腹巻のうへよりかけける法衣の袖を巻あげ。大太刀と前低よとこ
 ころし。長刀とかいこところわり。堂杖をつきたるもわり。奈良法師と
 見えさる。身はおろのわれをわ。さか不敵の洞九郎也。これと見
 ころく。あひて。逃んとせし法師原。とて引さる。色あくらる。雪なる
 山蛭の洞九郎とふ。汝ら。隠悪と犯せしころ。汝が心は知ぬべし。と
 今わらぬ。わらふ。おろと。かゝる。古法のころ。は行ふ。覚悟せよと

いひて高手小手はいまゝなれば。香晒へ走りうて父は取つ。何科あつて
 此様。縄目よいあひあ。かど分説へあゝぬいぬ。まぬれ。うたふ。とあ
 妾とらう。やうたまんと。泣き。とゐれば。法師原の情氣もあ。とるの
 管る。まゝわら。ど。妨さ。とゐて。つさ。背後はわり。方灯と。とも
 彼所へ合破とけ。灯火消る。此方よ。法師原洞九郎を。らう。は。うて
 ぬり。松の嵐もあ。まり。跡へ。闇夜と。うら。彦惣は病人な。う。
 一腰と携て。何ま。んと。膝行出。探り。うて。香晒。つさ。わ。う。こ
 誰ぞ。香晒。今の。騒。何事。と。問。て。香晒。起上り。奈良法師と。が
 き。父と。い。連行。と。い。彦惣。打。警。且。此方。と。手。と。り。て。
 片家。又。此。灯火。も。あ。ら。う。て。闇。と。月夜。を。へ。て。た。親。罪人
 子。孝女。黒白。た。人の。性。難。義。の。あ。降。る。涙。の。種。と。り。う。

備翌日村長来り。香晒はひひる。昨夜その洞九郎。囚もゆさう。子細さだめておん身等。知るまどき。奈良の法師。飯路。某が。りくに立らん。洞九郎が。婚娘。まどある。いふれど。彼等。いふ言。なれば。唯洞九郎が。罪の様。と告。あせよ。といひつりて。入られ。其罪の子細。とふ。洞九郎此辺の山。は狩。とひひる。折く。奈良は。立越。夜。まづ。若草山。入春日山の落鹿。を。とる。数多。いふ。あのか。何者の仕業。と。おれど。近郷の。獵夫。等。疑。か。い。に。獵人仲間。は。訴人。ありて。洞九郎が。仕業。は。極。り。古法。のご。と。行ふ。と。のこと。あり。奈良の。鹿。は。春日の。仕者。あれば。誤。て。殺。して。土の中。に。埋。られて。石子。誥。乃。刑。は。行。ふ。と。いふ。三歳の。童。め。と。れる。こと。あり。い。や。数多。殺。して。これ。を。賣。代。な。せ。と。いふ。う。あ。大罪。は。あ。と。や。ま。

若五十兩の金。ありて。其罪。と。あ。人。命。助。る。古例。も。あ。と。り。る。貧。家。よ。て。其金。の。と。の。い。れ。な。れ。ど。も。助。る。命。と。あ。せ。め。て。亡跡。の。い。吊。懸。は。あ。れ。さ。れ。わ。氣。の。毒。や。あ。不。便。や。と。い。ひ。て。涙。押。て。飯。り。る。香晒。は。これ。を。と。い。ひ。と。叫。び。て。倒。伏。正。体。あ。く。ど。あり。る。彦惣。も。病床。ふ。て。これ。を。唯。あ。れ。て。居。り。る。が。や。う。く。膝。行。出。て。香晒。を。い。び。醒。し。今。村。長。の。の。が。り。る。け。が。五。十。兩。の。金。あ。れ。ば。命。助。る。例。も。あ。る。よ。我。其。金。を。と。り。て。舅。の。命。と。と。い。ふ。と。あ。る。と。い。ふ。悲。む。こと。あ。れ。と。い。ふ。あ。ど。香晒。は。い。る。あ。ん。身。の。貯。た。ま。ひ。金。も。残。つ。て。と。あ。る。あ。り。る。あ。ん。病。は。卧。た。ま。ふ。あ。り。る。あ。の。費。か。あ。り。今。い。残。り。ど。り。あ。つ。て。少。の。物。は。さ。人。変。つ。わ。の。変。あ。る。あ。い。う。と。う。数。多。の。金。と。と。の。人。と。お。が。と。と。い。ふ。あ。り。る。あ。の。彦。惣。の。い。や。う。い。

あつていふより。其金もかゝる物にこれよりして。皮籠の裏より箱に入つて
一つの茶入と取出し。いまどそあると委しなうと語らざりし。此茶入を
主君秘藏の物とて。薬のつくる形月と似たるゆゑ。更級肩衝と号
たまひ。袋へ望月の沙家と傳る。望月廣東といふ名物の裂とて縫せし
替袋は木辭裂とりちなる。園原山の古歌に。つぎみんとあん。それ
類まれなる名器あると。亡父はたまたつて亡父も又殊外秘藏せしゆゑ。亡跡
の遺留物とて。信濃を立去時も身とてあること。我死後より子よりつ
素姓正した証し。よもとあひねれば。かゝる貧乏の目を見ることも。代々
あつた。金ねば助る。この男の命。宝珠として救はざりし道は。わ
秘だ。これと賣て金。そのへべとて。幸ひ摂州天王寺村。茶器
どつたり商人あり。我信濃よりし。相知る者あれば。此茶入は我

自筆の昏簡とて。つうへせば。氣づかう。五十兩は買取は必定あり。
我の病中なれば。せん。とて。これを携去金にかえて来より。とて。
いとく。昏簡を。あつた。花押を。とて。渡す。彼商人は。あつて。あつて。
いふべし。委し。いふ。且村長の。り。と。立。金。その。あつた。あつた。あつた。
父の事猶豫ある様。願ひ。あつた。と。頼。あつて。直。天王寺村。へ。急。いふ。
いふ。昏簡。へ。夫の誠心。と。いふ。いふ。いふ。いふ。我父の悪事。いふ。
さ。いふ。秘藏の。此茶入。と。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
あ。いふ。いふ。権心。躊躇。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
狼狽。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
あ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
飯の器。を。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。

あうへあへやうかふ必端居しと風はあううかふか。薬もそこまゐて
われ手づくのといへといひわけて。裾を高くかひらうて。そぞろく出ゆたぬ。
かくて香晒へ村長の家より立ちうて。く其事を頼かき。ひささ心せうたぬ。
歩みれざる足といひ。臨月うた腹をひいてゆく。あつた。あつた。路もさうぞ。
焚路をたたらちめて。やうく。天王寺村より到彼商人の家をたつて。茶入
をいへ。香筒をいへて。夫の教のどくひひり。果して五十兩の金さうひ
るん。限りき喜び金と彼袋より入て懷にとり。飯路より臨て平野の郷と
とらると。日へ金れより。時は雨雲かひひて夕月夜の陰く。鶉鳴る
草原の掛指と押分てつとわう。髪漢。大脇差をうとたんと。
拔足ふて。後つけて来るる。香晒へ蛛手より。畦道を。片時も早く
と急るに。彼男時分より。わあひん。うう。うう。香晒を撲的。踢倒し。

懷の金と棄ひ空中と飛かじりて逃去ぬ。香晒へ氣絶し。権倒れ。く
居より。梢の雫をうて。口より入やう。息をうとく。起上り。懷を
探して。こつ。こつ。こつ。仰天し。跡追ひんと。あつた。何方とわても
あつた。氣もたけ。足もき。走る。走る。あつた。あつた。あつた。
立つ居つ。いさ。宿世の惡報。よて。八重よ。あつた。難義のう。ま。ま。
難義と。あつた。義理。あつた。金。あつた。情。あつた。益人。や。二つ。あつた。宝を
いへ。夫の命と。あつた。夫。對し。金。途。中。で。奪。も。し。と。
何面目といへ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
心の乱れ。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
南无阿弥陀仏と合掌し。已。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
坐。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

我今らで死ぬ時父の命も救れど夫の病と看病する者もあらず。失身
一つと失ふへ四人の命と失ふなり。たゞ人操へ破るをも。失身と阿曾比屋は
質入しと金とそとの父の命と救ひ子と産て後阿曾比とありて其金を償ふ。
四人の命の助る道理。妾もその命ありて八つ裂きあるてもいさ心も
かえりとも。獨言いひて。袂の石とて捨死ねる人死しぬ因果さよていひ
て。又も石と捨。あひあて連をい。夫よりれ子とあてて。君傾城もあ
る。肌を穢と苦とい死ぬまもまゐる。あひれと外もまゐる様ゆかしと。
いひて。又も石とて。失身と賣と夫より。あつるまゐるひがさ。妾が
そつ一つかて。もるまゐる。と変定し。石と破りどるをも。打たれ
て。失野と立去ぬ。諸彼若芝が家へ往ていひる。あつるのこゝろて父の
命ととる。妾が身と賣て。急は五十兩とひ金と。その人をもとるひ

と。と折のく。懐胎あれば。當分此身と質入しと金と借。安産して
後阿曾比とあり。くひが。あん身失媒とてたびまんや。あつる若芝是と
ま。身と賣とこの自由あり。殊は産の女の命定と常言まゐる。バ
懐胎の女と質と取て金貸へ。妙家のわづら。若胎内の子を墮
る。媒とて。くひも金とて。まゐる。とて。へ香晒ハカと。あつる。
いふ父の危急と救へ。た。宿せ。腹の子と。あつる。情を。
又も思案はれ。くひも子と。いひて。親を失ふ。道は。あつる。と。覚悟と
さ。い。あつる。くひ。い。く。あつる。と。同ね。あつる。若芝。あつる。と。あつる。心と
さ。あつる。あつる。い。あつる。仕方。あつる。此。二。上。嶽の。岩。穴。は。一種の。菌。あり。四。季。子
とも。に。生。さ。る。子。と。孕。獸。誤。て。これ。と。常。る。時。に。立。地。は。子。と。あ。つる。鹿。の。胃。心
あ。つる。の。み。て。これ。と。知。ら。ど。て。食。ふ。以。辺。乃。山。は。鹿。の。ま。れ。る。の。以。故。あり。

人のこれと煎じて飲べ十二時をたて驗あり。いづれ月へうつるとも子を
脱と事奇妙す。母の身は少しもあまらな。只これと飲て七日乃
間獸肉を食ふといひの。若獸肉を食合とれば血を吐て死する。山稼す
りの人これと知らねども。妾が前乃夫の医師とてありしゆ。此妾を
委くば。彼菌より覺えぬ。まれ手のかうふ所もあれば。妾明朝
彼山より取来りてまわらざる。これと煎じて飲めば。さうぶ。
よも媒い。やん。獸肉さへ食秘べ少しも身はあまらなけとべ。必
氣づふ。ふと。これ。幸神崎の妾が。さうに。妓家わと。今宵のうらふ
彼所へ。明日金持て妾が。とまで来る様。ふひ。さうて来。さう。
湯身乃容儀。とて五十兩乃身乃代。最安。さう。ふ。香晒。ひひ
ひ。と。さう。と。悲。い。れ。ど。か。さう。せ。さう。一。危急。さう。せん。と。

あ。さう。さう。と。頼。さう。身代。五十兩。年。季。と。や。ん。の。三。年。と。極。め。
さ。い。孫。證。文。の。わ。と。ふ。て。父。は。昏。さ。う。以。事。と。夫。と。あ。う。せ。ひ。て。病。の。さ。う。と。
あ。さ。う。れ。夫。と。樵。沙。汰。と。さ。う。さ。何。と。も。密。さ。う。て。た。と。さ。う。岩。さ。う。
打。さ。う。さ。心。得。い。と。ひ。て。さ。う。さ。さ。う。さ。香。晒。の。別。と。告。て。立。出。さ。う。胸。と。
押。さ。う。さ。何。氣。さ。う。顔。と。て。家。と。取。り。さ。う。彦。惣。の。待。佐。と。さ。う。体。と。て。さ。う。や。
い。さ。う。金。持。て。取。り。さ。う。と。い。と。さ。う。さ。う。さ。さ。う。さ。且。安。堵。と。さ。う。い。さ。う。さ。
さ。う。さ。さ。う。金。の。さ。う。の。ひ。が。夜。と。入。ぬ。れ。途。中。の。や。と。氣。づ。さ。う。さ。金。の。彼。所。と。
預。か。さ。う。明日。取。さ。う。と。さ。う。に。契。約。と。て。取。り。ぬ。と。さ。う。彦。惣。と。さ。う。と。さ。う。
さ。う。さ。心。づ。き。と。さ。う。い。さ。う。さ。の。身。と。て。往。来。ま。れ。さ。う。夜。道。と。金。持。乃。て。
取。り。さ。う。か。つ。つ。さ。う。明日。の。さ。う。と。て。取。り。さ。う。片。時。も。さ。う。男。の。命。と。さ。う。
べ。い。夫。と。て。我。も。今。夜。の。安。堵。と。て。睡。り。さ。う。と。さ。う。い。さ。う。さ。草。卧。つ。さ。う。

ぐく 休といへといひて枕をつた。かどろくもやく 睡入り。香晒へ胸の
 裏所せれもどひてけて睡れど。唯灯火は向合て居り。小夜も
 中々更渡り。四更の鐘も遠里の栲衣の音は打交る。事の子細を昏
 置。涙をまぜて研墨の音も夫はまぜせし。そのべもひ雁代色明の
 宿をかゆ身と。あけ秋の長き夜も短き管の筆の帽。りてもと名は
 めいでやいと。あけ歎ふ沈みて。笥の水のひせう。露乃玉巻國栖紙は裏
 昏端昏あけく薄く。乱る昏はどろろり。



善惡因果序品

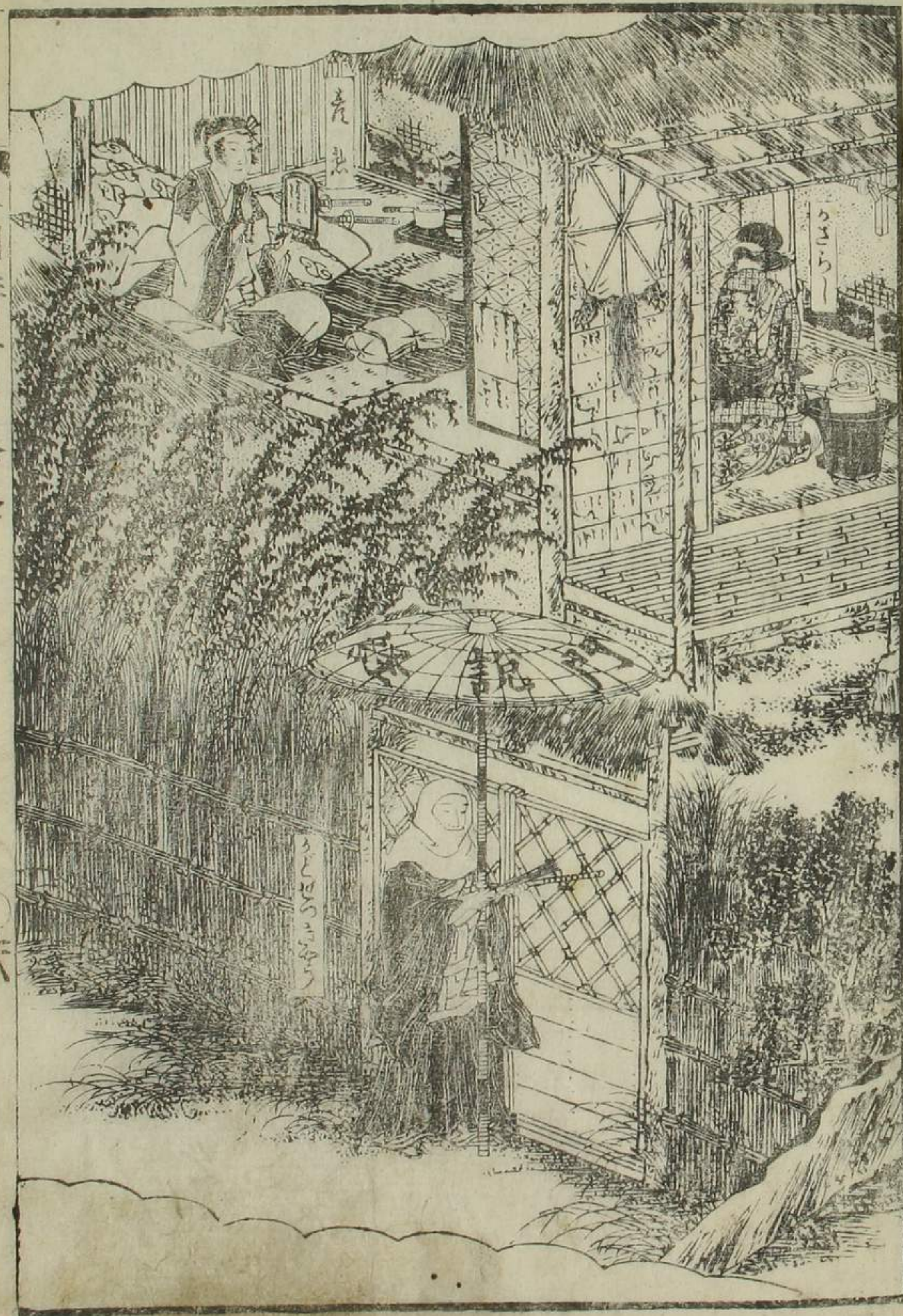
後談

儲の岩芝へ其夜香晒が身賣の媒せん。攝州神崎よりく身
 支度し。門口まで出る折し。夫胸毛の黒平といふ者。旅より取来
 めれば。いとうもつ。と。今宵かど眠りあふ。そのひきどといひて伴ひて裏へ

入。至よつり。物語し。儲岩芝色を頼りて。仕合のいふあり。つるやと尋ねば。
 黒平や。笑状度の仕合望外に出。これと見えといひて懐より金袋と
 取出して見れば。岩芝これと取掌のせておもとと試。こいよわど。
 金あり。昨夜の灯火今朝の喜鵲。福亦むかひ。つらう。いふ。限り
 多く喜ひ。紙灯と挑て金と算れば。五十兩あり。うらやま。荒鳴し。く
 う。偶袋は目をつけ打。熟看て。儲は心づき。はく。夫は對
 此袋の妻が足見。見えある物あり。これ。山蛭の洞九郎。山猿。昼飯乃
 器と入り。袋あり。は。金はい。う。と。得。あ。ど。と。う。ね。れ。ば。黒平。い。く。
 此度の旅行は甚不仕合せ。手とひ。あ。う。あ。て。眠。ら。ん。と。せ。し。か。初夜の程
 平埜郷にて。个様く。乃。女。を。見。つ。け。懐。か。も。ひ。え。え。う。ゆ。あ。後。と。つ。け
 て。棄。取。し。は。金。あり。彼。女。洞九郎。が。袋。と。り。ち。い。は。う。う。う。と。あり。と

人ハ若芝手と打ちて色と高くしつゝ其女ハ洞九郎が実乃娘
香晒といふ者あり。身後行の跡乃其女が男と連て古郷の当地に
臥り。夫婦といふ洞九郎が家ニ居るなり。此金ハ今様くつゝして
洞九郎が罪と賞んふ。所持の物を賣てりぬる金なり。ことと
奪も一ゆゑ。おのれが身と賣て再五十兩の金とそこのへんと。されど
妾ハ其媒をうのめ。彼ハ類まれなる養女なれば。身の代百兩と得て
いと安んじ。彼と百兩は賣半と彼まづつゝ。半ハ妾これと取べく。今
已ニ神崎へつゝやと立出つ。所あり。聞まされ。とて。彼女け身と
見あふ。とて。されば。とて。此所ハ住といふ。とて。此所ハ居
る。とて。彼が身ハ代百兩を張らど中取つて。夫婦とも何方へも逃
退はあつ。とて。の家具ハ此所捨か。錢目なる物ハ今宵のうちに外へ

運ひ。とて。黒平い。とて。それとて。思案あれ。我族商人といひ。旅
い。盗る。其のふ。知る者あり。とて。左か。とて。此所ハ長居
あ。とて。い。とて。身ハ今宵のうちに物とて。今様く
所ハありて待。妾ハ明日とて。おのれを彼所へ。共ハ何方へ
逃去。とて。互ハ。とて。若芝ハ神崎とて。出。黒平ハ
近き家の馬と盗来り。着。衣服の。錢目なる物とて。び
荷物ハ。とて。馬ハ。とて。彼金袋を首。馬の口綱をとりて出
ゆ。とて。諸ハ香晒ハ其夜書置て。とて。程。夜ハ明。とて。
ひ。とて。心ハ。とて。鏡。とて。水ハ。とて。顔。とて。髪
とて。わ。とて。身ハ賣物とて。花。とて。簪。とて。衰。とて。時ハ。とて。
眠りと醒。とて。起上り。香晒くとて。呼。とて。一色。とて。彼所ハ。とて。藥



詫麻彦惣侍女
 香廬とみそこと
 あつて信濃を
 おひきつる
 山崎の
 洞九郎
 家
 居て
 難義
 あふ

旅人香廬を
 威定剣て
 金を
 奪ひ
 去り

飲せ。粥ををらるゝとて近く居る。背とさう腰を枕暗なる
 めぐり。うらひ。秋瘦でい本復いかつゝか。権のうらの生別とありあへ
 心。の裏の暇を。とて権介抱。かかえを時をうらうら。彦惣のやう
 我よりぬへど。片時も早く彼所へ。金取て来るべし。金見ぬうら
 かりつらど。うらふと。子とかりて身と賣と。知らぬ夫のうらやと。
 彦惣の氣を。うらうら。うらうら。いそがせせん。うらうら。悪うかいせと
 うらと心。いせ。うらうら。て立上り。めぐる因果の糸車。又昏置と
 ひとびつ。愛別離。苦の筆。又昏置。されぬ。又故張のうら。障子とて
 きりて。母屋のうら。又出来。折し。彼方の簀と押分て。若芝。顔を

さうい。うら。手も。うら。きと。うら。めど。香晒。い。それと。うら。え。立寄。べ。袂。うら。と。彼
 菌を取。うら。て渡。い。是と。煎。て。と。飲。や。が。て。神。崎。うら。金。持。て
 来るべし。必。うら。うら。うら。か。と。い。て。飯。うら。うら。香。晒。い。是と。夫。と。知。ら
 せ。と。埋。火。を。簀。子。の。端。と。持。出。藥。鑑。は。苔。井。の。水。と。汲。入。菌。と。入。て
 火。の。上。の。せ。團。扇。と。把。て。わ。ぎ。て。心。の。裏。は。うら。うら。の。廣。き。立。界。は。妾。程
 因果の悪。うら。又。うら。い。心。うら。うら。い。うら。うら。一人の親。獄。屋。は。あり。偶。うら。うら
 子。と。失。ひ。命。うら。うら。て。連。を。い。夫。と。別。と。うら。うら。うら。浮。川。竹。は。身。と。沈。り。
 肌。と。穢。と。苦。うら。うら。い。どの。うら。うら。あ。うら。うら。親。の。血。筋。大。切。と。の。うら。い。
 子。あ。れ。ど。も。是。非。あ。く。失。小。可。愛。さ。よ。左。り。孕。の。男。の。子。と。喜。嬉。うら。うら。これ。指
 折。て。月。の。うら。と。待。倦。て。足。と。屈。て。夜。も。卧。高。き。所。へ。手。と。わけ。ぬ。も。安。産。と
 福。ぐ。い。と。お。ろ。う。て。あ。ま。う。子。と。あ。う。何。毒。ぐ。て。の。うら。うら。き。ど。妾。が。着。うら

振袖の小裂集て縫立し。つぎくの産衣も終帷子よとて守縫に
 つけざるあり。子安地藏の鉢の緒以借てあめる腹帯も迷路よつぎ
 繫事とあり。胞衣以とこひ土器も碎て上よつてとあり。あひまうけぬ
 事とあり。身獨で育るも母と乳母の二人ま背負つて寐こととあり。
 慰る為よと覺えておきし子護歌。あつた山越る死出の旅。里は散らぬ
 水子塚。鳩の車や鼓鼓。未来の為よとあり。とて。襦袢ひひく紗の頭巾。小豆
 枕や涎掛。兼て用意のうめあり。催生薬もさんの在と。いとを為よ
 貯と産毛も剃で共終ふ。瓦の壺を棺にて埋むべしとあり。さひきや。土よ
 蒲團も着られど。石よとく乳もあつたれば。くろむ乳房の一滴を手向の
 水ととへり。焼塋の稚子。夜に鶴子。故に迷ふ。在る人の。疤痕。麻疹。疹で子と
 さんだて。心乱る者もわれど。それへも。子顔を見ても。うへの敷ん

くれ。我子の顔も見ど。若さとの丘で遇入るこも。盡未來際。赤子とい
 知事ありぬ因果さよ。我といふ。獨言。恩愛切ある悲と。五臓六腑
 も悩乱して。乳綱もさるさちせ。深と嘆の通してや。胎内乃
 子の顔も動さるべ。自己腹と抚さる。あか可愛や。親子の縁のわれ
 こと。身身や。より来し。月の光り。以てせせせ。暗し。暗し。迷
 ひと。支情あり。とも邪見とも。つべと詞いあ。れど。五月。目。人の
 形とあり。八月。ありて。五体全との。身と動る。理ど。胎内にて動
 子の。生。て。達者あり。と。定て。健。生。立。に。不。便。や。か。を。皮
 一重。よ。つて。られ。顔。見る。ま。乃。あ。つ。た。ば。あ。つ。た。腹。と。割。て。あ。つ。た。顔
 見。や。死。ぬ。覺。悟。乃。我。身。の。死。と。千。代。万。代。も。活。と。そ。ろ。あ。い。ん
 活。と。に。活。さ。れ。ど。た。と。月。足。と。よ。て。育。ど。と。生。を。こ。ろ。あ。つ。た。

此世乃の身又産色とせめてまてえよりと。ひつ腹と枕おに。
 夫は嘆き紙ばせと袖ひきひるふの泣哀とつ人も愚なり。彦惣の
 心る嘆と露あふどば人か。とあふど。獨言よりひるる。香晒ひるや
 余程や死つん。彼か居ぬ間。父母は一言お叱とやさむやとて。うめ
 つ立上り。函の障子と押あけて。算の水は手と清め。皮篋乃裏より
 父母乃位牌と出して上坐とせ。且親人乃と死乃道せめて。一服茶と
 ため。供養せむとあひて。遺留物の茶箱と取出。火桶は香を
 らゆせと土瓶をりの阿弥陀堂地獄の釜乃蓋とて。仏果と秘し。
 茶茶碗とくひたまふと。炮碌乃。もひかれて。紫の雲よりゆる服紗。
 客いひか。位牌はて。亭主はひるる病人の。これと餘波とる。う
 手さねもふ。伴茶乃湯。親子乃縁乃薄茶と。あつて。そあふる

一服の手向の水と冷ぬべ。儲るや。く手とつ。父母乃靈魂を。あふ。
 某若気の誤。よて。主人の掟と背。親の家名と絶せ。更不忠。こも
 不孝。こも。よ上。と詞か。父母これを悪。と。も。か。を。ま。な。か。天罰を
 まぬれ。が。う。業病は苦。今日翌日。由。知。と。され。頓て。草葉乃
 蔭。み。て。目。は。つ。冥途。は。た。て。つ。り。恩。と。か。う。又。秘。藏
 の茶。入。と。此。度。賣。代。か。せ。更。不。孝。の。う。不。孝。あ。れ。も。舅。乃。命。と
 と。く。為。余。儀。あ。れ。こ。も。ゆ。べ。偏。は。沙。免。さ。れ。う。妻。の。腹。は。一。子。と
 ま。う。け。い。へ。某。の。相。果。る。こ。も。妻。は。遺。言。し。お。に。切。り。と。生。立。て。某。の
 り。う。う。せ。沙。跡。と。い。と。様。い。う。さ。せ。ん。孫。乃。口。一。遍。乃。手。向。乃。念
 佛。と。千。万。卷。の。經。陀。羅。尼。も。お。が。り。冥。途。で。沙。受。く。こ。も。う。よ。
 た。と。某。の。不。孝。乃。罰。で。狂。死。と。う。こ。も。う。は。は。底。を。腹。乃。子。の。平。産。と

つとやう。何ぞぞか守るらん。と活人なひふいごき。つとやも苦し
息の下。父の戒名。春譽夢幻居士。母の戒名。秋譽泡沫信女。頓證菩提
南无阿弥陀仏。あまご佛。息もたぬげふとあて。熱は焦る。舌は根は
こり。病の責念佛。我子乃為の枕鉦。知ぬ回向。哀なる。香晒へての
紙門。又身と寄て是と云。我身はく子と云。夫乃心のハ。其の所
とて皆義理。よせり。事なれば。皮肉もあられ。骨肉も碎る。とらして。親の
為。とらひあが。われかど。よてよ。かを子と。つと脱と。よあ。のぶ。と心と
愛。とる。時。親。忽。石子。詰。れ。も。又。堪。ぐ。彼。方。と。や。と。く。と。と。又。方
と。れ。と。と。と。親。と。あ。ひ。子。と。あ。ひ。て。あ。か。し。心。く。と。と。が。つ。や。く。子。の。再
得。り。べ。親。の。う。て。び。得。べ。う。ど。つ。か。あ。ひ。翻。て。も。飲。杯。あ。あ。ぬ。又
藥。と。覺。悟。き。あ。り。折。し。も。あ。れ。折。戸。の。外。は。站。し。門。説。經。の。修。行。者。と。

生死長夜。またえ。長柄の傘と打。つ。げ。佛の教。經。文。と。俗。は。ま。す。
説。經。乃。籛。乃。竹。の。廿。廿。菩薩。節。由。唱。歌。由。殊。勝。ま。て。い。と。哀。と。と。と。り
○。帝。令。頂。礼。衆。の。中。の。さ。あ。あ。う。た。へ。を。あ。り。親。は。さ。だ。づ。る。あ。は。れ。
法。事。の。表。と。と。と。り。つ。つ。や。二。つ。や。三。つ。や。四。つ。乃。幼。子。と。
ぬ。乃。乳。房。と。と。あ。れ。て。依。比。乃。河。原。は。集。て。骨。の。三。時。の。男。も。大。名。
運。び。て。塚。に。は。く。教。の。三。と。た。の。あ。ひ。ご。よ。へ。小。石。と。拾。ひ。て。播。せ。は。む。
一。重。は。ん。で。父。の。ぬ。二。重。つ。ん。で。母。の。さ。る。三。重。は。ん。で。も。西。に。む。た。
櫛。や。ど。る。掌。に。あ。の。せ。き。や。う。王。兄。弟。秋。と。あ。と。あ。つ。つ。と。い。や。幼。子。の。
泣。く。石。と。運。ぶ。あ。り。も。ま。ま。を。石。と。て。ま。れ。さ。れ。指。り。岩。の。ま。ま。と。
身。上。紙。朱。は。深。な。り。て。父。と。息。一。母。と。息。一。と。唯。父。母。の。ま。ま。づ。り。い。て。
其。從。打。伏。て。さ。の。苦。氣。は。嘆。く。あ。り。あ。り。怖。や。獄。卒。が。鏡。映。日。此。服。と。

初めのと邪眼つけ。汝等が横槍を置けりて見分ち。かくての初めは
 なまじり。そくそと横槍。成仏秘法と有りけり。鉄の横槍を
 ありわけて。槍をのこすを打ち。あつてのこすや。初子の。又うち伏て
 泣叫。呵責。ひまどあり。罪人。わらる。殊。子。伏。罪
 科。母の胎。十月の。苦痛。さめ。生。出。な。と。せ。ふ。七。と。せ
 と。産。一。初。な。さ。れ。づ。ち。て。父。母。は。嘆。と。か。る。の。声。一。か。り。た。涙。ど。う。し。母。の
 乳房。又。その。つ。き。て。泣。乃。出。ず。其。時。は。せ。り。と。胸。と。打。て。く。母。の。こ。こ
 と。も。の。こ。の。こ。も。か。ど。て。報。乃。う。れ。づ。と。胸。と。た。く。其。苦。の。極。落。の。座
 又。母。の。涙。を。水。と。なり。て。其。身。に。さ。る。歎。あ。と。子。ゆ。ゑ。の。園。乃
 呵。責。え。り。る。罪。科。乃。あ。る。ゆ。ゑ。は。依。比。の。河。原。又。迷。来。て。あ。り。こ

吾。患。と。う。る。こ。よ。河。原。乃。う。ち。ふ。あ。れ。わ。り。婆。婆。小。て。嘆。く。父。母。乃。
 一。念。こ。り。て。報。乃。う。れ。づ。の。う。ち。の。う。ち。乃。父。母。や。飢。と。さ。く。ひ。て。さ。び。あ。と。
 乳房。あ。つ。て。遠。う。れ。の。報。乃。忽。消。さ。せ。て。水。い。と。と。燃。わ。り。其。身。を
 焦。して。倒。れ。く。入。火。の。報。乃。あ。れ。ど。あ。ふ。か。く。と。た。小。児。等。の。色。を
 花。と。ま。り。来。て。地。産。善。薩。な。た。て。ま。つ。り。權。呵。責。と。の。が。ま。ん。と。嘆
 乱。さ。る。大。お。の。の。ろ。と。ま。れ。ど。驚。き。初。の。の。変。え。れ。ば。踏。流。て。の
 狀。彼。乃。荊。棘。の。刺。又。身。と。さ。れ。と。て。鮮。血。又。深。り。け。り。か。う。く
 花。と。ま。り。来。て。仏。の。前。な。た。て。ま。つ。り。あ。り。又。遠。出。る。水。子。等。の。胞。衣。と
 既。又。あ。つ。け。り。花。折。ま。も。あ。り。河。原。又。捨。る。枯。花。を。は。は
 ら。も。へ。て。さ。い。や。仏。乃。ま。は。遠。め。た。て。地。産。善。薩。又。な。り。る。陽。枝
 名。又。その。つ。き。た。を。け。た。ま。へ。と。秘。入。あり。生死。流。轉。と。ま。れ。秘。入。

六趣輪回の業とい。唯是のまにわづらふ。祇ぞ長秋の袖より深るれむ。
夢のわづらふまゆめか。唯神がまゝに地蔵尊。まゝいをとりむさ
たまへ。とぞ唱へる。

香晒へむむこれとて居る。時を時折り折て。佐比の河原の説経
節。わが心あやういとませこのまゝあり。坎立は出ぬくうゝ罪も報も
あるまじきとこそちひし。われびて胎内の子も罪ありとよ。邪見か
母とていふ。二重つで母の爲と。胞衣とわづらひて這ひまゐり。小石を
ひらいて嘆らん。胞衣をとて埋む。手とく唇と教らん。そのくち
筆墨も唇わたの料とらん。身と投む。我袂にひらひへる。細石
も。子の積塔とあらん。金へりくは五十兩。金も我子と殺とくと。口と
とく。とて独言。牙とて身とく。簀子も撲倒。むせうてとて

泣居る。時は村長いとく。走來り。唯今奈良の法師と。洞九郎
と率て某が方より來られ。今一時と過る。坎壁に於て生あぐ土に埋め。
石子詰り刑よか。とて人のまゝ。罪と貧乏心あり。とく
金と持來り。今一時が生死の場。危いどといとく。とて飲り。
彼方の笠と押分て。岩芝顔とに。神崎より金持ち。我家より來り。
待侘て居る。とく。とて飲たまへ。とく。とてひあきて。の
所よ。片家の方より。彦惣が色とて。とてい。金とく。
何狼狽てひぬ。とて。とて。二方三方身一つ
は。煎り詰る。菌の。我子より。阿鼻地獄。大焦熱の苦。とて。か
る。悲し。軒の玉水目り。落ちて。とて。葉鏝。涙も熱る。かりひ
あり。天狗道の熱鉄も。飲杯あり。坎時と。かりひ。とく。とて。

福犬の
名を
おぼ
しめ
る

早鐘時うらうと。耳よりうらうと。氣も半乱。藥と茶碗よりうらうと。地獄
菩薩と念じて。眼と鼻と舌と。胸と腕と。飲んどううらうと。やれやれ
あまー以金で難義とまうと。うらうと。金の色と垣越え。ふれふと。茶
碗よりうらうと。打おと。藥の流し。色にけて陸離と。陸奥山よりうらうと。
あて。黄金の花と咲せう。香晒の夢現と。もりまんと。いそぐ。いそぐ。
集めていそぐ。いそぐ。数も丁ど五十兩のうらうと。あまうのうらうと。さよ。
唯惘然として居うらうと。時と茶碗よりうらうと。ぬの煎汁。福犬の
食物の器の裏より流し入る。柱よりうらうと。孕犬折節。以食物を
うらうと。うらうと。急庭より倒て身よりうらうと。血とうらうと。頓て子よりうらうと。脱
るゆと。香晒是と吃と。えて。あ奇妙の菌や。我是と飲んどう。うらうと。うらうと。
あぶさ。危う。うらうと。我身よりうらうと。うらうと。犬と不便と。うらうと。

以金と恵ん。うらうと。今の門説經の修行者。うらうと。所縁何故と
かる危難をうらうと。うらうと。跡追やてと。うらうと。いそぐ。いそぐ。
出んとせ。うらうと。片家より彦惣が屏風と力と。遠逝出て。やれやれ。香晒
の落魂。我く。誰の所縁の者。うらうと。其金。いそぐ。孝と。天帝の憐
み。たまのうらうと。うらうと。神仏の冥助。うらうと。九人乃所為。うらうと。
あやえど。跡追やと。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。
子細糸車と結う。以金。うらうと。今より。知る。うらうと。片時も。うらうと。
其金持て。村長乃方。うらうと。行父の命と。うらうと。うらうと。うらうと。香晒を
けふ。こりと。點頭。金と額。うらうと。押戴。喜び。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。
独彦惣。あや。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。
来る。山下風書。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。うらうと。

賽之河原圖



親の
罪を
かみ
て
か
ろ
う
か
ら
い
し
け
む

小兒
樹に
のり
花を
供
地蔵
尊
の
あ
か
し
る
水
を
あ
か
し
る
地
上
に
あ
か
し
る
花
を
あ
か
し
る
と
供
を
あ
か
し
る



父母
の
水
を
あ
か
し
る
と
供
を
あ
か
し
る
地
上
に
あ
か
し
る
花
を
あ
か
し
る
と
供
を
あ
か
し
る

と
供
を
あ
か
し
る
地
上
に
あ
か
し
る
花
を
あ
か
し
る
と
供
を
あ
か
し
る

したわどしう。香晒が蘭の汁と飲のぬぐると見をけんさち。竹林の裏に
 かん居るうろろ。香晒あひうけあゝ金と得て。身と賣ふあゝが移が。
 心の計策粗語とて。以地と逃退うへ。何とるこも妨か。以上の香晒が
 跡と追行彼金と奪ひとるべしとあひけ。畔づひは近道を馳行る
 所。ひうのうろろ。当地は見馴ぬ若者等四五人。棒を提捕縄を
 持て。いそぐく来り。若芝とさう圍てりやう。汝の胸毛の黒平が妻
 あん。我輩の泉州堺の者うろ。黒平支旗商人とさう。突々旗を
 出て賊とさう。昨夜既来つる夏註進の者わけて明白るけう。
 大鳥乃郡司の令とうけて向ひるに。や何方へ逃去て家へ唯
 神崎の娼家橋六とやんの者。獨寐とづて居るゆゑ。彼もあや
 れば彼所も留かきね。彼もさへ汝の以地は来るう。我輩以所は

向ひる。汝と捕めて夫の行方と孔明せんがあらう。さう腕とまいて
 ぬくあやうけうとさう。若芝是とさう。諸の夫の悪事もや露顯せうと驚け
 とも。元來膽ふた女あれば面もあつさど。ひささう嘲笑郡司の命あや
 武士とこそさうむけらるべきに汝等も命ありさ心得ざるさう。夫の
 行方決してあつさどさう。若者等ひささう。武士をさう越えていふつて
 逃走るべしとありて。我輩も命あや。无益の言を費さど。さういふと
 あゝとひて。縄とまいて立ぬ。若芝の夏とせせ。傍辺の猪追小屋あり
 なる猪追棒をかつさうと打てぬ。女は似合ね不敵者棒どくめせよと
 ひて以方も一同は棒をさうとあやうく挑戦さう。若芝は風よりぬき胡蝶は
 ひとく身とさう。飛上りていさうと打沈めて。難倒し。雪と持する柳の
 枝の弱氣もええて。腰より裏に棒をさう。腰より裏に棒をさう。腰より裏に棒をさう。

若者どもい遂に敵に討て。旬々の体にて逃去り。岩芝へ口かどもあさ
 奴原かあを諷て棒を捨一息つきて立去んとあつるに。さねわどろ猪追
 小屋の蔭に窺居る神崎の橋六つと走り出て背後より岩芝は押拵
 つき。我折のく大金を持て汝が家は居るゆゑは。不慮の疑とつけられ
 汝を捕へゆきて。汝身のわろと立ちあがりといひて。力ときめて押伏んとする
 岩芝へあやとちやあやと呼りて身と轉。襟首腫て田の中へ岸破と投
 こ。鳴子の縄をたれたぐりて。高手小手を括わけ。首よりけりる百両の金を
 奪ひとり。懷よりてあやに笑。彼と失へば是と得る。とれ十分の幸あり。のそや
 家にへ飯られどと独言するより。も急雨斑々と降来れば手早く紫山子
 の蓑笠をとりて。頭よりき身にかり。何方ともなく逃失り。縄目より
 橋六へ身上とて泥より。恰も田荒のむくくして。跡追ゆんと身とせられ。

鳴子の音の磊落々と。遠田の雀かどりて。ゆりくわつと飛去ぬ。わろ所へ
 取前の若者寺近村の百姓どもと呼集。人数をきりて来て。岩芝と
 逃去て橋六独縄目よりわいて居るに。括るべき者いくらぞと。括られきた
 者いくらぬ。これと鳴の橋六は。汝も貪義の種なれば。率てゆくとて引立れば。
 縲紲の恥の其く。金も奪ちり。いふあり宿世の報ぞといひ。面を
 むめて嘆き。涙まじる。巖の潮と真水の環まで。捕はゆくと不運なれ
 と。これぞ人ひのわたり

- 門説経の修行者何人といふ。又風は吹き。れる音おさる。行方とも知んと
 みる。畜生勸發品第十と読得て知べ
- 門説経といふ者。長柄の傘をこ。簾をとりて物とむ。後より三張は合せて
 語る。更ふかき。説経者。門説経。説経太夫寺の考。并は冒予が骨董

集あつは詳あきらく。発はつ見けんの時ときを待まち得えて見けんる處ところ一

○佐比河原の事こと。一説いっせつ云い山城國紀伊郡さきのくに紀伊郡は佐比の里さとなり。三代實録さんだいじつろくは貞觀じんくわん十三年閏八月じゅうさんねん 閏はつがつは制せい有あて百姓送葬ひやくしやうそうさうの地ちを定さだめし餘いふくは下佐比上佐比しもさひかみさひか其地そのちと定さだり。佐比寺さひでうは延喜式えんぎしきにも。九原送葬之輩くはんそうさうのはい。更留さらう柩こ於橋頭はしづとと見えり。きに佐比河原さひのくわんと冥途めいどより小兒こゝろの集あつまる所ところと。且地藏尊ぢざうそん是こゝに化益けやく一ひとのつゝ。此葬所このそうじやうじよは小石塔こせいたく多おほく。或あるは石像せきざうの地藏尊ぢざうそんもありし。いひはしめんとし。

○三代實録さんだいじつろく卷之二十二きやくじふには山城紀伊郡貞觀寺やましろのくに紀伊郡じんくわんじ建立たての初はつ其名そのな定さだむ。嘉祥寺かしょうじと假かりて年分ねんぶんとある。号なづて西院さいいんと称なづけたる。と記しるせり。此寺このでうの葬所そうじやうじよと。西院さいいん乃河原このくわんといふと。説せつわれども。前の説さきは拙せつ考かうとある。○地藏經ぢざうきやうは是菩薩得十種福このぼさつとくじゆしゆふく一者ひと女人にふじん泰産たいさん云い。此誓このちか言ごのゆゑは子安こやすの

地藏腹帶ぢざうはらたひ乃地藏ぢざうなり。世よは呼よびさへなむ。佐比の河原さひのくわんと小兒こゝろの苦患くわんとといひありし。つゝと決き故こきん

○佐比の河原さひのくわんにて小兒こゝろ小石こせきと塔たと積つむ。つゝは変法華經へんぽうけふきやう方便品はんぽうひんより至いた童子戲どうしぎ聚沙くしや為な仏塔ぶつたく如是かく諸人等しよじんらう皆みな已成佛道いじやうぶつだうと見えり。これに拠よてある。いふべし。是寺このでう亦また文ぶんは用もちひ。更さらある。と筆ふでのついでにあらせむ



